

幸福の赤いサクランボ



若い世代に感じた「中国」

相乗りしたのは、長春から飛行機で来たという若いカップルだった。2人は来春結婚する予定で、一緒に休みを利用し、結婚式用の写真や動画を撮るために長白山観光に来たのだと話してくれた。

2人は「宿泊先も登山予定もまだ決めていないので、もし良ければこれからの行動を一緒にさせて

まず運転手お勧めの旅店(宿)に予約の手続きをして、すぐに登山口の駐車場まで送ってもらった。

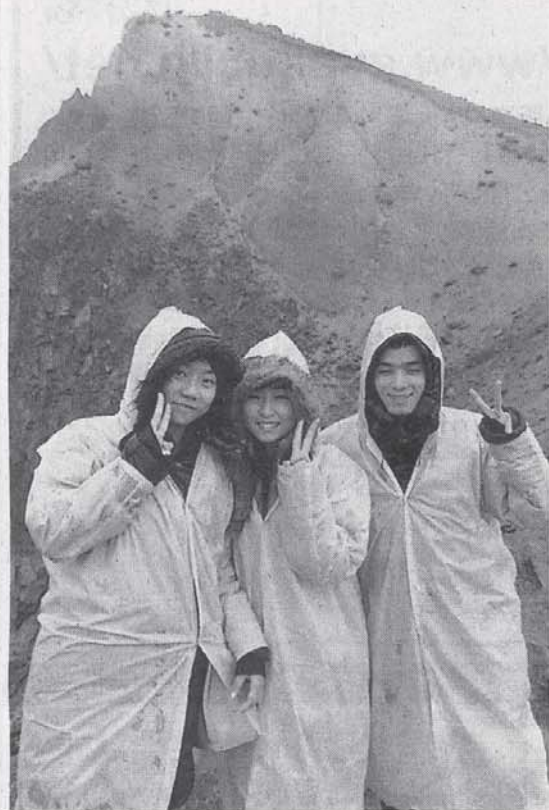
登山口のビジターセンターには、大勢の韓国人旅行者が登山バスの順番待ちをしていた。

長白山は中朝国境のほぼ中央に位置し、天候が良ければ火口湖の向こう側の北朝鮮領が見えるはずだった。ところが、この日はヒョウが降り、雷も鳴ってきた。急いでバスに乗り込み、下山した。

私の通訳として同行している谷祖玲さんは、黒龍江大学大学院で日本文学を専攻した28歳。夕食の北朝鮮料理を食べながら、谷さんと若いカップルが会話を交わすのを聞きながら、ふっと、目の前にいる3人それぞれの自立した態度や表情に、中国人は急速に経済だけでなく、心も豊かになっているのだなと思った。

中国の旅2日目の9月2日、黒龍江省ハルビンを飛び立ったボンバルディア機は曇り空の下、松花江の源流に向かった。吉林市、松花湖などがはっきりと見える低空飛行。午前10時半に吉林省白山市の長白山空港に到着した。

空港を出ると、広葉樹林に囲まれた広い駐車場に数台のバスと多数のタクシーが止まっていた。すると私たちを見つけたタクシーの運転手が近づいてきた。「バスはあと1時間以上待たないと出発しない。相乗りで長白山の登山口の白河市まで行かないか」と誘われ、乗ることに決めた。



9月2日、長白山の天池(火口湖)展望登山路にて。左が谷祖玲さん、右2人が長春から来たカップル